

バンガロールでの学生体験

太田仁志

一九九八年にインド政府 ICCR から奨学金をもらい、私はバンガロールにあるインド科学大学院大学 (IISC) に二年ほど在籍した。ここではその日常について少し紹介しようと思う。

IISC は自然科学系の大学院大学では世界でも名高い、インド屈指の大学院兼研究所である (でも私がいた文系の経営研究科は中の上か上の下くらい)。学生は非常に優秀で、学位取得後はボス・ドクで欧米の研究機関に行く人も多い。アメリカ留学に必要な二四〇〇点満点の GRE を二三九〇点という人もいたし、出来が悪かったと落ち込み伏し目で得点を教えてくれた友人は二二〇〇点だった。私も面識のある卒業生は、ITバブル崩壊時の資産運用で数億円を稼ぎ、三〇代半ばから優雅な隠居生活を送っている。恋愛もいざずれ数式で表せるようになると、真顔で話す数学専攻の学生もいた。真面目というか、遊ばない人も多いようで、市街から外れた場所にできたクラブが若い人たちに人気と聞き、週末ちょっと見てこようと思うとある友人に話したら、「そんなところ行っちゃだめだ!」、「何で?」、「だめなものだめだ!」とたしなめられた覚えもある。そのクラブではそんな友人と年代のかっこいいインドの

人たちで一杯だった。休日に研究室の仲間とピクニックを計画した別の友人は横笛を持って行くという。理由を聞くと、「ピクニックなんだから普通持って行くでしょ」という答えが返ってきた。

私はインドの学生と同じ生活をしたかったので、当然キャンパス内の学生寮に住んだ。ICCR の奨学金は当時月額二五〇〇ルピー (七〇〇〇円程度) だったが、学内にいる限りは十分にお釣りがくる。希望者への朝昼晩の給食はおいしく、午後のスナックとあわせて月に一〇〇〇ルピーもかからない。学生寮は確か一日六ルピー程度だったと思う。私の部屋は六畳くらいの広さで表面はコンクリート、机と椅子のほかは蚊帳を引つ掛けるバーの付いた鉄製のベッド、背の高い据付の収納、天井には大きなファンがあり、窓には鳥やサルが入ってこないようにと鉄柵が付いていた。インドの他大学に比べて寮施設ははるかに充実していたはずだし、私には住めば都だったのだが、部屋を見に来た日本人はたいがい言葉数が少なくなる。当時非常にお世話になっていた日系企業の K さんから、家のお手伝いの人の中学生の娘さんにインドトップの大学を見せたいと言われ、二人にキャンパスを案内すると、その後お邪魔したお宅で

「いいから今日は飲みなさい」といつも増して親切にしてくれた。その娘さんは勉強をがんばると喜んでいたので、それが私にはそれ以上に嬉しかった。ちなみにあとで聞いた話では、私の部屋があった古い Mブロックはインドの学生も避けていたそうだ。

一九九九年当時、IISC のキャンパスに住む学生で携帯電話を持ったのはたぶん私が最初だったと思う。その当時一番安い、単に通話とメールしかできない重量感のある機種が日本円でなんと三万数千円。支払いをカードにしたところ、インドの街の家電屋で三万数千円も何か購入するのはおかし、カードをなくしていないか、とすぐにカード会社から日本の実家に問い合わせがきた。しかし一年後には安くなった携帯電話を手にする人たちがキャンパスにも増えてきて、PDA (携帯情報端末) らしきものを自慢する学生も現れた。時間の流れの速い二年だった。

それぞれにそれぞれの体験があるのは当たり前だが、私のインドでの学生生活は、何となく時空を超えたような、刺激に事欠かないものだった。

(おおた ひとし/アジア経済研究所地域研究センター)